

ラオスの こども通信

78号
2020年11月発行

発行：(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

- ラオス語「文字絵本」「数字絵本」の誕生 ▶ p.1
- はじめる・つながる・つくりだす ▶ p.2
- 「ラオスのこども」の仲間たち ▶ p.4
- メコンのほitori「店」 ▶ p.4



*写真の説明はp.4をご覧ください。

ラオス語『文字絵本』『数字絵本』の誕生

私たちは、ラオスでこれまでに約200種類の図書を出版してきました。その中で子どもたち、そして学校の先生方に人気が高く、20年以上増刷を重ねている『文字絵本』。その誕生を振り返ります。

今から25年前の1995年3月。当会はラオスの絵本作りに携わる人の育成を計画し、日本から絵本作家のわかやまけんさん*、やべみつのりさん*を派遣し、講義と実習の研修をおこないました。

参加者は、幼稚園から高校までの先生や絵心のある人など30人。作品を作った経験者はわずかで、多くが絵筆を手にしたこともありません。当時ラオスは、本が少なく売上がほぼなかったため、作家という職業が成り立っていませんでした。学校では美術の授業はなく、色を使って絵を描いた経験がないのが当たり前でした。

絵本の原点

わかやまさんは、「子どもが初めて出会う絵本」のテーマで講演。「絵本の原点はお母さんが赤ちゃんに話しかけることばです。赤ちゃんはお母さんの心地よい響きの言葉を耳にしてすこやかに育ちます。そういう心構えで絵本をつくりましょう」と語りかけました。子ども向けの本は教え諭すものと思っていた参加者には新鮮な響きでした。絵の具の使い方、色の混ぜ方から参加者は熱心に、楽しく学び、10センチ四方の手作り絵本を

完成させました。絵具を使わず、色紙を切り抜いた動物や果物もできあがりました。



参加者の作品

画期的な色彩と構成と造形の絵本ができあがった

講義と実習の様子をわかやまさんは次のように振り返っています（『ラオスの子供に絵本を送る会通信』第6号の寄稿より）。

ラオスの絵本状況がよくわからないままの「ラオスでの創作絵本ゼミ計画」であったが、ひとまず子どもの発展段階にそって「ラオスの1・2・3の絵本」と決めて出発した。

さて、「絵本ゼミ」で絵本を作り出したらモンダイが続出してきた。「今日の今日まで絵具や色鉛筆を手にしたことがないので描き方がわからない」と。もともと絵というのは美術教育を受けなくても描けるものと思ってはいたが、数日しか時間がない。しかし制作されてきた30冊近い10センチ×10センチの「ラオスではじめて制作された近代絵本」は見事なものだった。「画期的な色彩と構成と造形の演習」だった。「ラオスの若い人が作ってラオスの子どもに贈られるラオスの絵本」の出現だった。喜ばしいことだ。

これには「会」からの「豊富な画材の提供（特に折紙として持っていた色彩紙）」が大きく作用したこともあったが、ラオスの若い人が絵の資質がゆたかであったことが大きかったのだろう。とぎすまされた造形でないところの造形が民族の資質とあいまっての美になっているのだ。ラオスの寺院や織物の造形や色彩は美しいし豊かな美的環境を作っているそのことが大事なのだ。

1995年3月の「絵本ゼミ」は「ラオスの近代絵本の日」として記憶されるだろうし、30何冊かの小さい絵本も同じように記憶されるだろう。嬉しいことだ。

2年がかりで出版 ～生みの苦しみと大きな感動～

このときにできた作品をもとに、ラオス語の「文字絵本」と「数字絵本」の出版を計画。できるだけ多くの若手に自作が出版される機会を与えたいという趣旨から、文字絵本は2巻組にして、7人の合作としました。動物をモチーフとして、文章はラオスの高名な作家ドゥアンドゥアンさんに、わかりやすくリズムカルな詩を書いてもらいました。

日本に戻ったわかやまさんに添削指導を依頼。出版に向けて、より質の高い作品づくりの努力をしました。とはいえ地方在住者もいて連絡をとるのも難しく、原稿収集などのやり取りに時間を要しました。

原画完成後、デザイナーの大竹雄介さんのご協力で装丁をし、印刷はラオスでは必要な用紙が入手しにくいというえ、きれいなカラー印刷ができないためタイのバンコクで行いました。

見積が予算を大幅に超え、色校正やサンプルのやりとりがスムーズに進まず、「今は王様の仕事で忙しいから」と後回しにされたり各段階で予想外の遅れが積み重なったものの、1997年1月、ようやく3種類合計15,000冊が出来上がりました。

色鮮やかでデザイン性の高い表現は、ラオスでは画期的な絵本だと好評で、ラオスの教育関係者からは「過去ラオスの児童図書の中で最も高い水準にある」との声が上がりました。図書室に置くと、そのきれいな表紙に惹かれて、すぐに手に取る子ども達。声を合わせて詩を読んだり、動物の絵を見ながら、文字を当てっこしたりと、とても楽しんでます。

ラオスで人気の絵本のオリジナルを 再現したい

今も人気が高い『文字絵本』の第7版を計画しています。原画が行方不明で、今回オリジナルの再現にチャレンジします。これまで再版できなかった『数字絵本』も再版予定です。ラオスらしいオリジナリティあふれる絵本を子ども達に届けるために、冬募金にご協力ください。

※わかやまけん(若山憲):グラフィックデザインから児童書の世界へ入る。『きつねやまのよめいり』(こぐま社)では、第16回サンケイ児童出版文化賞を受賞。1995年のラオス訪問以降、ラオス語文字絵本の制作に協力。代表作として、2020年に50周年を迎えた「こぐまちゃんえほんシリーズ」(同)など。

※やべみつり(矢部光徳):子どものための造形教室を16年間主宰。現在も各地で造形遊びや紙芝居作りのワークショップを開く。ラオスには専門家として5回以上訪問し、子どもや大人向けにワークショップを実施。絵本に「かばさん」(こぐま社)紙芝居に「ほねほねマン」シリーズ(童心社)など。



やべさん(左)、わかやまさん(中)とチャントソン(1995年)

はじめ

中等学校2校の図書館が開館!



引渡し式テープカット。建物約120㎡(サカ中等学校図書館)

ヴィエンチャン県ボンホン郡サカ中等学校とヒンフープ郡中等学校の図書館建設工事が完了し、ともに10月に晴れてオープンしました。これは外務省日本NGO連携無償資金協力「中学校の図書館整備を通じた読書推進事業」によるものです。

オープンに先立ち、現地では関係者を集めたオリエンテーション、協定書の調印、郡教育局・村教育開発委員会の研修などを通じて、地域行政が学校と連携し図書館運営をサポートしていく体制を作っていました。学校の先生や生徒達が、図書館を適切に管理・運営していけるよう、図書館研修も実施し、準備を重ねてきました。

先生によると、開館後は2校とも連日数百人を超える生徒達



蔵書3,000冊(ヒンフープ中等学校)

が訪れて大盛況とのことです。これからますます、先生や生徒そして地域の人々に愛され活用される図書館になるように、引き続き当会も活動を続けていきます。

授業での活用を目指して再版

当会では10年以上にわたり、学習院女子大学から出版支援をいただいています。今年度は中等学校の授業で活用するために、人気の高い2冊を再版しました。虫の本は、生物の授業で様々な昆虫を調べるのに参考に。郷土料理の本は、家庭科のほか、各地の風土や気候、作物について知る地理の学習に活用できます。分量を計測する数学の授業にも応用できるね、とスタッフからアイデアが出ました。



『家のまわりの虫』身近な20種を取り上げ、生息域、変態、食物連鎖、及ぼす害、ことわざにいたるまで紹介

『私たちの村の料理』フアパン、カムアン、セコン3県の郷土料理のレシピを紹介。ラオスの地域色の豊かさがうかがえます



【新たな交流の場をオンラインで作ろう!】

ラオスと日本がつながった!オンライン活動ミーティング

7月18日、「ラオスの今を知ろう～ラオス駐在員と話すビデオ生中継～」を行いました。コロナ禍の影響で開けなかった活動ミーティングがオンラインで約半年ぶりに開催できました。

今回はオンラインだからできることをと、ヴィエンチャン事務所と参加者をつなぎ、駐在員の渡邊スタッフから話を聞こうと企画しました。初めて当会と関わる方、すでに関わりがある方に分け2部構成とし、21人の参加を得ることができました。

コロナ禍でのラオスのロックダウンの様子、ステイホームの過ごし方の日本との違い、ヴィエンチャン事務所の状況などを紹介しました。

「生の声が聞ける貴重な機会となった」「遠方からでも参加ができ、リアルタイムの情報を聞いた」などの感想が届きました。

遠方などでミーティングの場に来づらかった方もオンラインによって、参加のハードルが下がり、ラオスとつなぐことができるなど、今後も新しい活動に挑戦ができそうです。

初・オンライン開催!ラオス語絵本作りイベント



完成した絵本と参加者の皆さん

(株)ニコンは、CSR(企業の社会的責任)推進活動の一環として、2018年3月から「ラオス語絵本づくり」のイベントを開催しています。ニコンはラオスに工場(Nikon Lao)を持つことから、日本に居ながらにしてラオスを知る機会とし、社員が自らの手を動かして社会課題解決に寄与できるボランティア活動を行うことをねらいとしています。終業後に社内の様々な部門の社員が集い、当会の活動とニコンの社会貢献活動の説明に続いて、日本語の絵本にラオス語翻訳シートを貼る絵本作りを行ってきました。

9回目の今回(2020年9月)は、コロナ禍における取り組みとして、在宅での絵本作り+オンラインでの活動説明会を開催しました。オンライン説明会の参加者は29組(約62人)、全体では70人の方がラオス語絵本を作りました。

これまで興味があっても参加ができなかった方も、在宅ボランティアとして参加することができました。新たな手法としてこれからの展開が楽しみです。活動に広がりや生まれることでラオスの子ども達が、もっと絵本にふれられるよう、これからも一緒に活動できることを願います。

当会では、このように日本語の絵本に当会で用意したラオス語翻訳シートを貼ってラオスに送る、「ラオス語絵本プロジェクト」への参加を広く呼びかけています。個人やグループでの参加や、当会スタッフによる講演とセットにして学校や企業でも実施しています。日本で身近にできる国際協力に、ぜひご参加ください。お問い合わせをお待ちしています。

スタディ・ツアーに代わる取り組み



子どもたちと日本の学生の交流

7月7日と7月14日、学習院女子大学の学生と当会ラオス事務所をつなぎオンライン授業を行いました。国際コミュニケーション学科の伊藤由紀子先生が実施する国際協力研修では、当会ラオス事務所を毎年訪れています。今年はコロナで渡航がかなわず研修が中止となり、何とか現地と交流ができないかというので、オンライン開催に踏み切りました。

授業は、学習院女子大学の出版助成事業で今年度再版した『家のまわりの虫』と『私たちの村の料理』をもとに進めました(p2をご参照ください)。1日目に、ラオスで出版事業を行う意義や効果について、駐在の渡邊が当会の活動を交えながら説明し、2日目はラオス事務所近くの小学生に参加してもらい、日本の学生とラオスの子どもが、自分の国の虫や食べ物について紹介しあい、お互いの国のことを知る「文化交流」をしました。学生のみなさんの質問から、国際協力への関心の高さがうかがえました。今回の講義がラオスに興味を持ったり国際協力に関わったりしていく一歩となればうれしいです。

ラオスのこども2020年通常総会をオンラインで

特定非営利活動法人ラオスのこどもの通常総会を9月12日、会場のライフコミュニティ西馬込とオンラインで開催。活動会員38人(書面表決者、委任状含む)賛助会員3人、活動協力者7人 計48人が出席しました。

第1部は、2019年度の事業報告案および決算報告案に関する事項が承認され、2020年度の事業計画書、予算案について、報告されました。

第2部は、「ラオス語絵本 読み聞かせを楽しむ」というテーマで、ヴィエンチャン事務所スタッフが出演する読み聞かせや劇を行う動画を紹介しました。チャンタン代表からは、読書推進活動の重要性と、子どもたちだけではなく大人へのアプローチが大切であることなどが語られました。あらためて本が提供する力の大きさを参加者とともに実感する機会となりました。

「ラオスのこども特別募金2020」報告と御礼

2020年6月中旬から9月末まで、「ラオスのこども特別募金」を実施しました。合計140件、1,757,042円の寄付金をいただきました。本当にたくさんの方にご協力いただき、心より御礼申し上げます。コロナ禍により様々な影響がでている状況ですが、皆さまのご支援のおかげでラオスでの活動を継続することができています。これからも、ご支援と応援をよろしく願っています。

(伊藤珠希/東京事務所スタッフ)

「ラオスのこども」の仲間たち

「ラオスのこども」との出会いが人生の転機に

ノイナー マニーヴォン (ナナー) / SCG奨学生



法律の本を手にとり、

ラオス事務所できどき仕事を手伝ってくれるスタッフの妹的な存在。5歳でお父さんを亡くし、姉3人兄1人、5人きょうだいの末っ子のナナーは、中等学校4年生(15歳)のときに、一家で暮らしていたヴィエンチャン県ヒンフープ郡を離れ、単身首都ヴィエンチャンにやって来ます。「きょうだいにはすでに家族がいたから、私がお母さんを助

けるために働かないといけなかったけど、勉強も続けたかった。だから、自分で決心してヴィエンチャンに出てきたの」

住み込みで朝晩は家政婦として働き、昼間は中等学校に通う生活を送ります。学校にいる時間以外は働きづめで、ほとんど自分の時間がなかったそう。「すごく里が恋しかった。でも村では働किながら勉強することが出来ないから、我慢したの」

2015年中等学校6年生のときに転機が訪れます。タイの企業(SCG)が主催し、当会が業務を受託していた奨学金に選ばれたのです。中等学校卒業後、大学でも受給することができました。「家政婦の仕事だけでは、家への仕送りが足りなかったし、大学まで進学できて、奨学金はとっても助かった」。国立ドンドーク大学の最終学年(4年生)になった今、そう振り返ります。

専攻は法学。「難しいけど面白い。将来は、弁護士になって故郷に戻り、村の人たちのために働きたい。」と語ってくれました。「田舎では、法律のことをよく知らない人が多いし、困っている貧しい人の役に立ちたい」

表紙の写真

先生をしているお母さんについて学校にきた男の子が、図書室で真っ先に手にしたのは「文字絵本」。まだ字を読めないけど、カラフルな絵を見ながら、絵本とおしゃべりしています。自分でお話を作っているのかな。仕事が終わったお母さん。「早く帰るわよ」って言いながらも、男の子が開いていたページの文字を読んであげていました。

ラオスのこども通信 78号

2020年11月発行 編集人: 森 透

発行: Action with Lao Children / Deknoylao

(認定)特定非営利活動法人 ラオスのこども

代表 チャンタソン インタヴォン

〒143-0025 東京都大田区南馬込 6-29-12 ミキハイツ 303

TEL/FAX 03-3755-1603

e-mail: alctk@deknoylao.net

HP <http://deknoylao.net>

Facebook <https://www.facebook.com/deknoylao>



叙勲のご報告とお礼

代表 チャンタソン インタヴォン

この度、令和2年秋の叙勲で、旭日双光章を受賞いたしました。日本・ラオス間の友好親善及び日本の外交官等に対するラオス語教育に寄与した功績によるものです。

皆様のご協力なしでは、いただけなかったもので、あらためて、皆様にお礼を申し上げます。本当にありがとうございます。



大学の図書館にある法律の本は英語で書かれているものが多くて読むのが大変、とラオス事務所の図書館で英語の勉強法の本を借りていったナナー。今も住み込みで働いていて、帰ったらまだ仕事があるから〜と事務所をあとにする彼女の華奢な後ろ姿に、自身で未来を切り開いていく力強さを感じました。

メコンのほとり店

生徒の胃袋、学校の売店

みなさんの通っていた中学校や高校には、売店や食堂はありましたか? ラオスの小学校や中学校には、大抵学校の敷地内に掘立小屋の売店があります。大きな学校になるといくつもあることも(生徒数約1,000人のヴィエンチャン県ボンサイ中等学校には、隣接する小学校も併せ校内になんと4つも!)

ラオスの学校の売店は、何といても「食べ物」がメイン。袋菓子からアイスキャンディーなどのお菓子里にジュース、ちょっと小腹が空いたときの揚げ物や、お昼に食べるカオピアックやフーなどの麺類、そしてパイヤサラダなど盛りだくさん。子どもたちのサイズに合わせて、お菓子は小さく小分けして売られていたり、麺もお椀がちょっと小ぶりでお値段も安かったりします。



今日は何にする?

揚げたて
アツアツだよ~



売店にはテーブルや椅子もあってその場で食べることもできます。売店のおばちゃんは、学校の先生の奥さんや家族がやっていることも多く(ボンサイ中では校長先生の奥さんでした)、生徒がお手伝いやアルバイト?で、配膳や皿洗いをしたり、自分で料理を作っていたりする光景もみかけます。ラオスの子どもたちにとって、学校の売店は、なくてはならない身近な存在です。

(渡邊淳子/ラオス事務所)